桟橋の案内板と、消えたコミュニティ

――White Rock に根を張った日系人の記憶と、多文化共生への問い――

菅野　紗礼

（津田塾大学　総合政策学部　総合政策学科　学生）

目次

1　海辺の記憶 1
2　約八十の家族 4
3　根を張るということ 7
4　奪われた朝 8
5　自由に歩いた私と、奪われた人たちと 9
6　受け入れる側になった私たちへ 10

1　海辺の記憶

カナダ・ブリティッシュコロンビア州の白砂の浜に、長い桟橋が伸びている。高校生のころ、留学先のラングレー市からバスに乗り、よく White Rock へ出かけた。桟橋の先でフィッシュ＆チップスを頬張りながら、灰色がかった太平洋をぼんやりと眺めていた記憶がある。

その桟橋の沿岸には、Pier Panels と呼ばれる案内板が並んでいた。White Rock を形成した様々なコミュニティの歴史が記されており、そのなかに「日本人コミュニティ」への言及があった。当時の私はさして気に留めることもなく、その場を離れた。しかし帰国から数年が経った今も、なぜかその一節が頭の片隅に引っかかり続けていた。

留学中、もう一つの場面が記憶に刻まれている。ある夜、ホストファミリーとアイスホッケーの試合を観に行った帰り道のことだった。車の窓から夜空を見上げると、定期的に街灯が流れていく。ふと、窓の外に日本語の看板が見え

た。「あれ、日本語だ」と呟くと、ホストマザーが答えた。「旧日本人街よ。今は危険な場所になっているから、近づかないようにね」と。

バスで通りかかったこともあった。いわゆるゴーストタウン化した街並みに、薬物中毒の人たちが魂が抜けたように路上に佇んでいた。日本語のスーパーの看板が、車窓からちらりと見えた。日本から遠く離れた異国の地で、自分の母国語が書かれた街が廃れていく――17 歳の私には、その光景が強烈な印象を残した。なぜ日本語の街が、こんな姿になってしまったのか。その疑問は、留学を終えた後も、どこかに引っかかり続けていた。

今回のエッセイを書くにあたって、White Rock の桟橋の記憶と、バンクーバーの夜の日本語看板、その二つの疑問を手がかりに調べはじめた。自力での調査は難しく、AI ツールも活用したが、情報の不確かさを感じた場面も多くあった。そこで思い切って、White Rock Museum & Archives に直接メールで問い合わせた。

返信を待つ間、日系カナダ人の歴史について広く調べることにした。White Rock 特有の事情とは別に、BC 州全体の日系コミュニティを支えた人々の出自は、滋賀、和歌山、広島の三県からの人々が大半を占めていた。なかでも和歌山県美浜町三尾村の物語は、一通の手紙から始まっていた。1880 年代後半、三尾村出身の漁師・工野儀兵衛がフレーザー川の豊富な鮭を故郷に報告したことをきっかけに、村から多数の移民が BC 州へと渡った。三尾村は後に「アメリカ村」と呼ばれるほど北米移民を多く輩出し、1919 年頃にはフレーザー川の漁業免許の三分の二を日系人が保有するほどに至った。また、バンクーバーでは 1907 年、大陸日報という邦字新聞が創刊された。日系コミュニティの声を日本語で伝え続けたこの新聞は、三十余年にわたって BC 州の日系社会に寄り添った。

数日後、アーカイブ管理者の Hugh Ellenwood 氏から返信が届いた。氏はわざわざ桟橋まで足を運び、Pier Panels の写真を撮影して送ってくれた。画面に写真が表示された瞬間、胸が高鳴った。朧げな記憶の中にあったあの案内板は、確かに存在していた。日系人コミュニティについての記述も、思い違いではな

かった。さらに氏は、過去の住民とのメール記録や関連書籍のページまで丁寧に送ってくれた。返信の書き出しは「Hi Saaya,」だった。カナダを離れて三年、目上の人にファーストネームで呼ばれる感覚を久しぶりに思い出しながら、私は「Dear Hugh,」と返信を書いた。見知らぬ外国の学生からの突然の問い合わせに、これほど誠実に応じてくれた彼の親切は、小さな芽を出したばかりの好奇心に、恵みの雨を降らせてくれた。



図1：Pier Panel “The Japanese Community in White Rock” (White Rock Museum & Archives / Hugh Ellenwood氏撮影・提供)

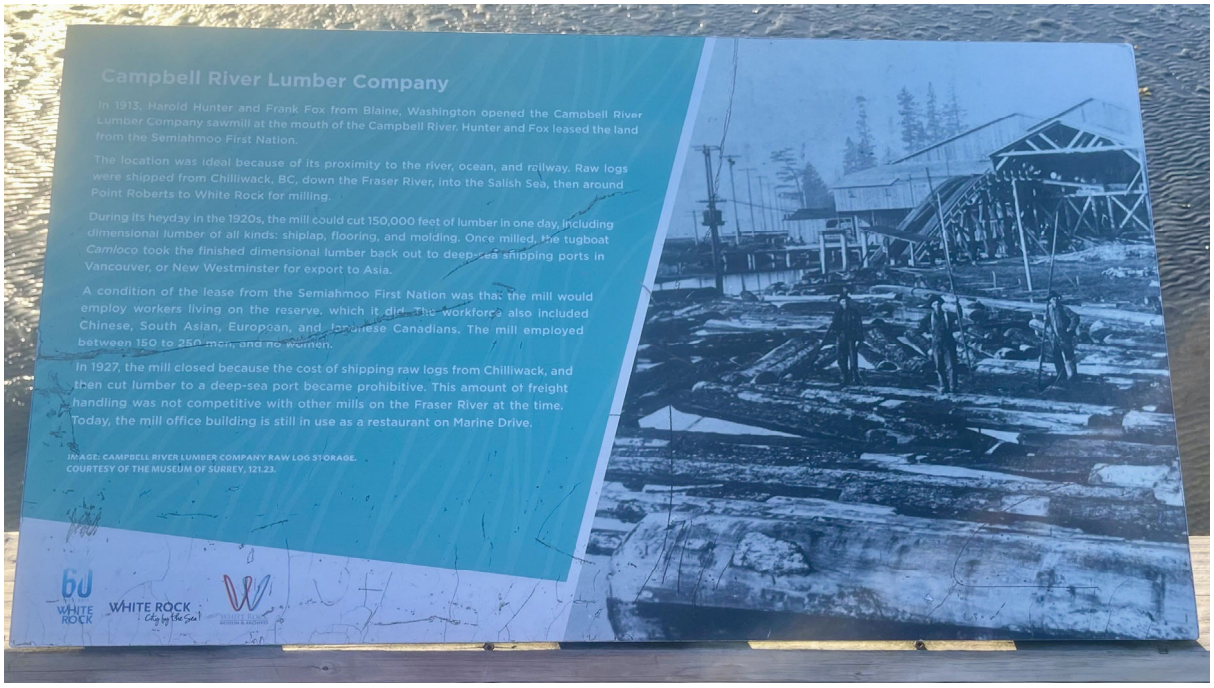


図２：Pier Panel “Campbell River Lumber Company” （White Rock Museum & Archives ／ Hugh Ellenwood 氏撮影・提供）

2　約八十の家族

White Rock の日系コミュニティの核となったのは、Campbell River Lumber Company という製材所だった。1913 年に操業を開始したこの製材所は、150 人から 250 人の労働者を雇用し、中国系・南アジア系・ヨーロッパ系とともに多くの日系カナダ人が働いた。製材所は Keil 通り周辺に日本人労働者用の住宅を提供した。Pier Panels によれば、製材所の操業中、約八十の日系家族が White Rock に暮らしていたという。

地元の住民 Don Munro が 1999 年に書き残した証言には、その居住区の姿が描かれている。約二十五軒の家屋が向かい合って立ち並び、往来には草が生い茂り、英国の村のような美しい空間だったという。牛乳配達のトラックとパン屋のトラック、そして自転車で新聞を配る少年――その穏やかな日常が、生き生

きと記されていた。

届いた資料の中に、『Who Was Who: Pioneer Japanese Families in Delta and Surrey』（Michael Hoshiko 著）という書籍のページがあり、そこには、実際に Keil 通りに暮らした家族の記録が残されていた。

田佐治郎（Frank）Shikatani は 1906 年頃に White Rock へ渡り、のちに写真花嫁としてツジが海を渡ってきた。福井県出身の小花亀次郎は、1918 年にカナダへ渡り、妻カネとともに Keil 通り 1381 番地に居を構えた。亀次郎は Campbell River Mill で働き、この地に根を張った。そして、沖縄出身の比嘉松もまた、1924 年に海を渡り、製材所で働きながら White Rock に家庭を築いた。



図 3：Shikatani 家族写真（1924 年頃、White Rock）　（White Rock Museum & Archives ／ Ed Shikatani 氏提供）



図４：858 Keil Street（2018 年頃の様子） Shinkatani 家が暮らしたとされる通り

1925 年５月９日、White Rock の日系コミュニティは「同心会創立貳週年記念」の集合写真に収まった。Obana、Irizawa、Sakamoto、Honda、Onodera、Shinmoto、Shigehiro、Kimura、Sameshima、Kanemura――そこに写る人々の名前が、アーカイブに記録されている。自分たちで団体を作り、周年を祝い、写真に残す。確かにそこに、根を張った人々の生活があった。



図５：同心会創立貳週年記念撮影　大正十五年（1925 年）五月九日　於ホワイトロック　（White Rock Museum & Archives ／ Don Munro 資料より）

3　根を張るということ

BC 州では漁業や農業に従事する者が多く、フレーザーバレーではいちご農家として生計を立てる者も多かった。都市に住む者はバンクーバーの日本人街を拠点に、日系人向けのサービスや商品を提供した。Pier Panels によれば、夏になるとバンクーバーから多くの日系農家グループが White Rock にピクニックに来ていたという。休息の場になったのは White Rock の土地柄なのだろう。日系人たちはたくましく生活の網を広げ、1920 年代には日本語学校まで建設された。

White Rock の日系コミュニティは、ただ働いていたわけではなかった。「同

心会」という団体を自ら立ち上げ、周年記念を祝い、写真に残した。それは単なる記念行事ではなく、この土地で生きていくという意志の表れだったのではないか。

『カナダ移民史』によれば、1915 年から 1945 年までの三十年間は「最も恥ずべき時代だった」という。戦争、不況、そして二度目の世界大戦が、移民への反発を生んだ。中国人移民の排斥に続き、日本人移民もその対象となっていった。しかし、White Rock の人々はそれでも根を張り続けた。製材所が 1927 年に閉鎖された後も、多くの日系家族はその地にとどまり続けたのだ。

4　奪われた朝

1941 年 12 月 8 日、真珠湾攻撃の翌日、カナダ連邦警察は日系コミュニティのリーダーたちを逮捕した。日本語学校は閉鎖され、大陸日報をはじめとする日本語新聞は発刊停止を命じられた。言葉が、先に奪われた。

翌 1942 年 2 月、カナダ政府は BC 州太平洋岸から百マイル以内の「日本に人種的起源をもつ人物」全員に退去を命じた。日系カナダ人約二万二千人は、家・土地・漁船・漁業免許を没収され、BC 州内陸部の収容所や道路建設労働キャンプへと強制移送された。収容所は、タール紙を貼った粗末な木造の小屋であり、ある者はテントで最初の冬を過ごさねばならなかった。男性は家族から引き離され、道路建設の労働キャンプへと送られた者も多かった。

White Rock の約八十家族もまた、同じ運命をたどった。White Rock は退去を命じられた BC 州沿岸のまさにその範囲内にあったのだ。製材所の閉鎖後も地域に根を張り続けた人々が、戦争を口実とした強制移送によってその地を追われた。Ellenwood 氏の資料によれば、多くの者は戦後、BC 州には戻らずオンタリオへ移住した。小花家が暮らした Keil 通り 1381 番地も、同心会の仲間たちが集った場所も、静かに消えた。

私がバスの車窓から見かけたバンクーバーの旧日本人街も、同じ歴史の傷跡

だった。かつて日系人が築いたコミュニティは、強制移送によって根こそぎ奪われ、戦後も多くの人々はBC州に戻ることができなかった。廃れた街並みと日本語の看板だけが、朽ち果てた切り株のように、かつてそこに人々の生活があったことを伝えていた。

小学生のころ、私は学習まんがでこの歴史の断片に触れていた。パールハーバー攻撃後、日系アメリカ人が叫ぶ場面があった。「私たちは帰化した。私たちもアメリカ人だ」。その言葉の意味を、子どもの私は十分に理解できなかった。今は分かる。あの叫びは、「市民」として認めてほしいという懇願であり、それでも届かなかった声だった。

5　自由に歩いた私と、奪われた人たちと

留学中、心が折れそうなとき、私は White Rock へ向かった。課題が山積みで、試験前で、どうにもならない気持ちを抱えたまま、バスに乗って桟橋へ出た。太平洋を眺めていると、不思議と気持ちが落ち着いた。長期休みが明けるたびに、「よし、また頑張ろう」とスイッチを入れる場所でもあった。自分を見つめ直し、また走り出すための場所として、あの桟橋は私にとって特別だった。

しかし今、私はその海岸が持つもう一つの意味を知っている。私がリフレッシュのために自由に訪れていたその場所は、かつて日系人たちにとって「生きる場所」だった。彼らは廃れに来たのではなく、根を張りに来た。同心会を作り、日本語学校を建て、大切に育てていた最中、ある朝突然切り倒されてしまったのである。

私はあの桟橋へ、自分の意志で行き、帰ることができた。心が折れたとき、場所の力を借りて立て直せた。彼らにはそれができなかった。「帰る」という選択肢を、戦争によって奪われていたのだから。

私が桟橋の案内板で読んだ「日本人コミュニティ」という一節は、その消えた歴史のかすかな痕跡だったのだと、今ならわかる。

６　受け入れる側になった私たちへ

多文化共生という言葉が、日本社会でも聞かれるようになって久しい。外国人労働者や留学生の受け入れが拡大し、街のなかに様々な言語が飛び交うようになった。私たちは今、かつての日系移民が置かれた立場と向き合う側に変わりつつある。

かつて BC 州の漁業と製材業を支えながら、「危険分子」として追放された日系人たちの歴史は、外国人を「受け入れる」ことの意味を問いかけている。経済的な利益が必要なときだけ受け入れ、都合が悪くなれば排除する――そうした論理は、八十年前のカナダと地続きである。

White Rock の桟橋は今日も太平洋に向かって伸びている。Pier Panels の案内板に、日本人コミュニティの名が刻まれたまま。Keil 通りには今、普通の住宅が並ぶ。かつてそこに約八十の家族がいたことを、通りすがりの人は知らない。バンクーバーの旧日本人街には、廃れた街並みと日本語の看板だけが残る。

知ることから始まる、と私は思う。知らないことは恐怖や脅威となる。偏見や差別を生む。それは、現在大学で多文化共生、ダイバーシティーについて学ぶ学生として、何度も思うことだ。負の歴史はしっかりと学び、見つめ直す必要があると思う。なぜ起きたのか、それはどうしたら防げたのか。繰り返さないために何ができるのか。目を背けるべきではないと思う。桟橋の一節に引っかかり続けた記憶と、夜の車窓に映った日本語の看板への疑問が、私をこの歴史へと導いた。その歴史を知った今、私は日本社会の「多文化共生」を問い直さずにはいられない。受け入れるとはどういうことか。共に生きるとはどういうことか。White Rock の消えたコミュニティは、静かにその問いを投げかけてくる。

参考文献

「人の移動とアメリカ」研究プロジェクト編(飯野正子・飯野朋美・小澤智子・北脇実千代・粂井輝子・小谷伸太・菅(七戸)美弥・長谷川寿美・増田直子・丸山悦子・三浦裕子)『エスニック・アメリカを問う――「多角からなる一つ」へのアプローチ』彩流社、2015 年

移民研究会編(編集委員=飯野正子・木村健二・粂井輝子)『戦争と日本人移民』東洋書林、1997 年

D・A・ナイワート著、ラッセル秀子訳『ストロベリー・デイズ――日系アメリカ人強制収容の記憶』みすず書房、2013 年 7 月 5 日発行。

ヴァレリー・ノールズ著、細川道久訳『カナダ移民史――多民族社会の形成』明石書店、2014 年

ミチコ・ミッヂ・アユカワ著、和泉真澄訳『カナダへ渡った広島移民――移住の始まりから真珠湾攻撃前夜まで』明石書店、2012 年。

東栄一郎著、飯野正子監訳『日系アメリカ移民 二つの帝国の狭間で――忘れられた記憶 1868-1945』明石書店、2014 年

佐々木敏二解題・解説『カナダ移民史資料 第 1 巻』(原書=『加奈陀同胞発展史』)不二出版、1995 年

Michael Hoshiko, *Who Was Who: Pioneer Japanese Families in Delta and Surrey*. M. Hoshiko, 1998.

Don Munro, ″*The Campbell River Mill, Related Items, Mike Honda Visit and the Japanese Community*,″ September 15, 1999(White Rock Museum & Archives 所蔵)

White Rock Museum & Archives 提供資料(Hugh Ellenwood, Archives Manager より)

『ナニコレ珍百景』(テレビ朝日)、2026 年 3 月 15 日放送、「和歌山県 紀伊半島の西側の先へ カナダに関係する建物が多い」